

# スイングジャーナル

昭和49年2月8日国鉄首都特別扱承認雑誌第1722号  
昭和28年7月15日第3種郵便物認可  
昭和49年11月1日発行(毎月1回1日発行)第28巻第13号

1974 NOV. JAZZ & RECORDS  
11



特別座談会

# ビッグ・バンドの現状を語る LET'S DRIVE TOGETHER

出席＝牧芳雄/瀬川昌久

森寿男(ブルーコーツ・リーダー)

山野政光(山野楽器専務取締役)

尾木隆(法政大ニュー・オレンジ・スイング)

上原辰一郎/山口裕司(慶応大ライト・ミュージック)

児山紀芳(本誌編集長・司会兼)

去る9月8日、日比谷公会堂において学生18バンドが参加してコンテスト形式による第5回山野ビッグ・バンド・コンサートが開かれましたが、当日の審査員及び集った人々の間で近年の学生バンドのレベル・アップが話題となりました。そこで同コンサートを一つのきっかけに、日本のビッグ・バンド界をいろいろ話し合ってもらいました。

**S J** 山野ビッグ・バンド・サークル主催(本誌後援)の大学ビッグ・バンドによる年次コンサート「レッツ・ドライブ・トゥゲザー」が、5周年記念ということで、とくに今年はコンテスト形式をとり入れて去る9月に開かれました。今日、集っていただいたみなさんはそれぞれ審査員として、または審査される側としてコンサートに参加されたわけですが、今日は大学のビッグ・バンドの現状、課題といった点について話し合ってみたいと思います。初めに牧先生、今年の実験ビッグ・バンド・サークルのコンサートに参加した18のバンドを通しておききになって、どういう印象をお受けになられましたか。

## ●学生バンドの実力はプロに比べてどうか

**牧** 学生のみなさんのテクニックが高くなったという点では、10年前と比べたら雲泥の差だという感じがしますね。ブルーコーツの森さんがここにいらっしゃるけど、18バンドもみていますと、多摩川で少しトレーニングすれば、プロでも使えそうだというのがないわけじゃない。そういった意味では、このコンサートがジャズの甲子園的役割を帯びるようになって、プロの人のスカウトの対象にもなりうるレベルに達したということは、たいへん喜ばしいことだと思います。アメリカなんかでは、学生バンド出身のミュージシャンが大ぜいいますからね。

もう一つは、ビッグ・バンドというのはプロの場合、ソロバン勘定があうというのは容易じゃないですよ。ところが、大学というところは少なくとも表向きには遊びなんだから、そういった意味ではビッグ・バンドの存立しうる唯一のフィールドですね。このごろの若い人は——こういういい方をするとS J誌の読者にしかられるかもしれないけれど——一般にソロ・ワークとかコンボという個人的な

ジャズには興味を示すけれど、ビッグ・バンドの魅力に慣れるチャンスが少ないんですよ。それだから、各学校にあるジャズの演奏団体には大きな意義があるし、それが今度の山野さんのご好意で5年間も伸びてきてコンテスト形式にまで発展したということは、たいへん素晴らしいことだと思います。ただ、これは高校野球や大学野球と同じで、残念ながら学生さんというのは卒業しちゃうんだな。それでコンビネーションを保つことが、なかなか難しい。今年はだれとだれが出ちゃうからボロボロだなんて話をよく聞くが、その次の演奏会に行くと、けっこうサマになっているのね。

**S J** 山野ビッグ・バンド・サークルで学生諸君の指導にこの5年間、引きつづいてあたってこられた森さんの印象はいかがですか。

**森** 毎年コンサートをやってるでしょう。成長が楽しみだったけれど、去年と比べますと進歩はすごかったですよ。はっきりいって、18バンド出た今年のコンサートをきいてウチのバンドにほしいと思う人が4～5人はいましたね。山野さんのところで指導にあたってきたこの5年間をふり返って、進歩の過程は加速度的でびっくりしているんですよ。まるで日本の経済成長みたいで……(笑)。

**S J** 森さんから、ブルーコーツにほしい人がすでに4、5人いたという話が出て、今日集っていただいた学生のみなさんは、おそらくその中に入っているんじゃないかと思いますが、このへんで学生のみなさんに自己紹介してもらいましょうか。

**尾木** 法政の4年でコンサート・マスター、それに楽器はアルト・サクソフーンをやっています。楽器をもったのは中学3年のとき、出身は高知県です。高校時代、最初は音大を志望したんですが体をこわして、結局大学のビッグ・バンドでジャズをやったほうが良いということになりました。



牧 好きなアルト・プレイヤーはだれ。

尾木 アルトというより、サクソではやっぱりコルトレーンが好きです。

山口 いま慶応の3年でトロンボーンを吹いています。この8月末から、ここにいる上原さんからライトのコンサート・マスターをバトン・タッチされました。今回のビッグ・バンド・コンサートが最初の難関でして、かなり緊張しました。小学校ごろからジャズをきくようになって、長野高校で同好会に入り演奏するようになりました。

上原 ボクの場合は、中学1年でラップを始めて、6年間ブラス・バンドでやって、高校のときハイソ（早大）とライトをきいてどっちに行こうか迷って、結局慶応に受かってライトに入ったわけです。クラーク・テリーのナマを聴きたいというのが、いま一番思っていることです。

森 両校の人がここにいるからじゃないけど、今年のコンサートではたしかに慶応と法政のアンサンブルは厚くなったね。それに日大リズムのアルトの2人、武田、伊東両君は抜群だったね。

山野 日大リズム・ソサエティは高く評価されてよかったんじゃないかと思いますよ。それに今年最優秀賞をとったのはライトだけど、来年ライトの強敵になるのは法政だね。

森 法政と神奈川大学。

牧 芝工もいいよ。

S J ビッグ・バンド・サークルを5年間にわたってご支援なさってきた山野さん、そもそもの動機とといいますか、このサークルの発端について話していただけますか。

山野 もともとはフル・バンの指導というところから始めたわけです。実は私もフル・バン育ちでして、タイコを叩いたわけです。いわゆるジャズ全盛時代に育ったわけです。それで、食えない大学のビッグ・バンドをなくしてしまうことがしのび難く、森さんなどのご協力をえてコツコツ始

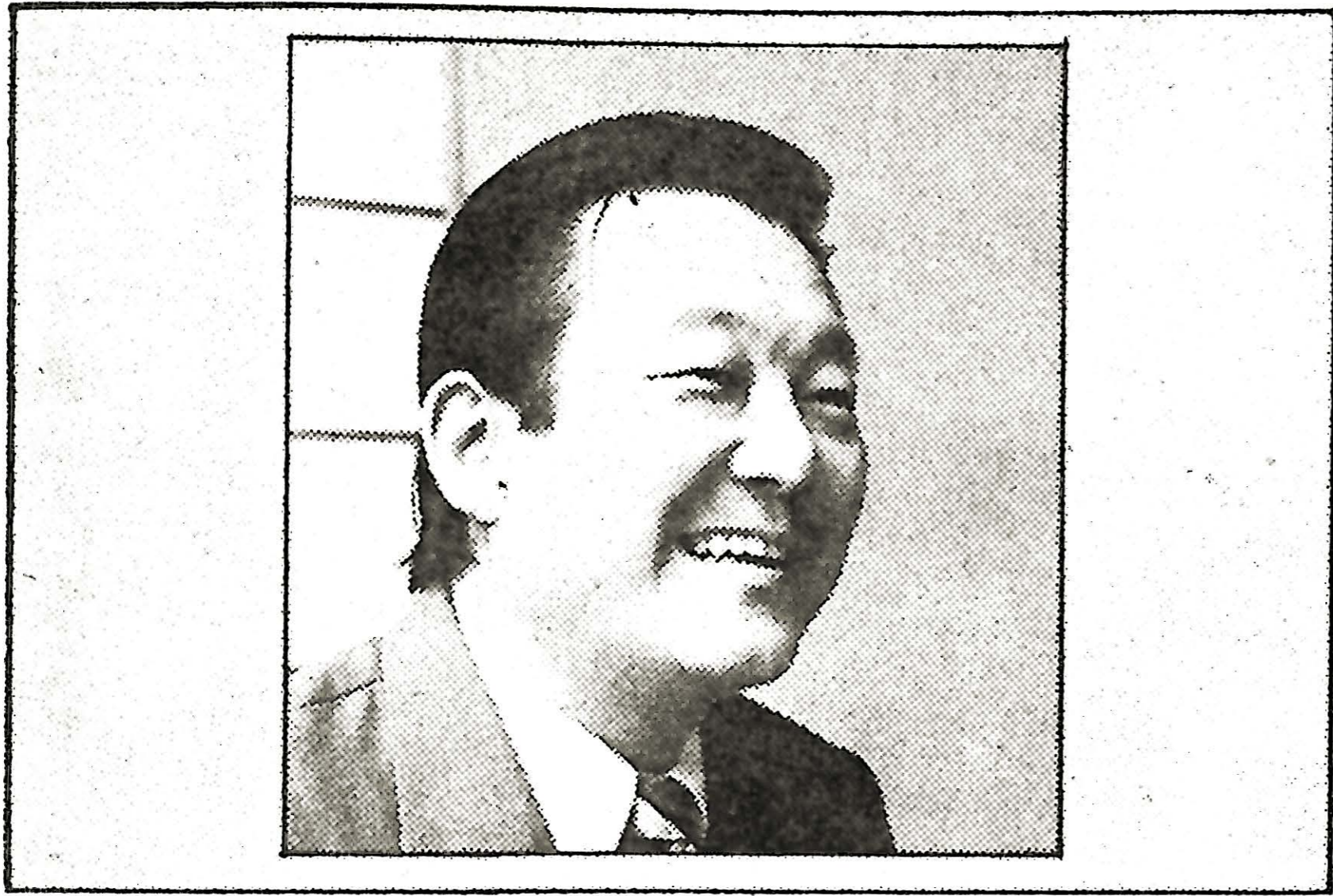
めたわけです。5年前の最初のコンサートは、チューニングもできない人がいて、そういう意味では大へんな成長だと思えます。

森 専務さんは練習所のそばに部屋があって、バンドの練習風景がいやでもきこえてくるわけですよ。

山野 まったくアラがきこえてくるわけです。ドラムがビート間違えたりすると、「ちょっとみてこい。だれが叩いている」なんて。そういうことをしながら5年間きたわけです。去年ボクが提唱して、学生さんたちにはかってコンテスト形式をとり入れたわけですが、来年からはこの形式を続けたいと思っています。それと、もっとワクを広げて全国的なものにしたいというプランもあります。

S J アメリカなんかの場合だと、カレッジ・バンド、ハイスクール・バンド、あるいはバークレーのような養成学校があってそういうところで勉強した人が、プロの道に直結していくルートができていくみたいですが、日本の場合だと、学生の諸君たちは卒業するとサラリーマンになってしまうというのが現状みたいですが、どうですか。

瀬川 日本のプロのビッグ・バンドのおかれている状況がかわらないかぎり、非常に難しい問題ですね。技術的には十分プロの世界に入っても通用すると思える人もいるけれど、まず先決問題は別のところで……。今テレビの歌伴が1回10万円くらいでしょ、いいところで。20人いるとすると1人5千円にしかならない。バンドの維持費も必要だから、1ヶ月まるまるやってもおそらく大学を出てサラリーマンになるよりお金には恵まれないですよ。それを考えるといまプロのビッグ・バンドをやってる人の気持ちは尊いというか、うれしいからそういう人たちが演奏しているのをきいてこっちも生きる喜びを感じるわけです。そういう状況があるうちは、学生バンドでたとえ秀れたテクニックを身につけたとしても、難しい問題が残るわけです。



▲学生バンドの成長はめざましいと語る森さん

**S J** 上原君、学生の立場としてどうですか。

**上原** ボク自身はもともとプロになる気はないんです。給料とかは別に考えませんが、プロになるとテレビやなんかで歌謡曲のバックをやらざるをえないという現実を知ってるから、やっぱり考えてしまいますね。

**山口** ぼくもプロになることは全然考えないんです。

**尾木** 現状のプロの人たち、ボくらより音楽的に数段すぐれている人たちがステージで歌の伴奏をやっているというのを見て、初任給がどのようということではなく、一般的に考えてしまいますね。

**牧** こうやって伺ってみると、現役の学生さんが、今日は3人しかいないけれど、みんな卒業してプロで飯を食っていかうとは考えてないわけです。それはさっき瀬川さんがいわれた社会的な待遇の問題とは別に、もう一つの問題がありそうな気がしますね。学生さんというのは、だいたい頭でっかちなんだな。アメリカの今のジャズの動向をつかんだり、イミテーションをしたりと感覚的にはすぐれている。しかし、根がパンとバターを相手にしたんではないから厳しさが無いわけだ。たしかにプロの中にもイカサなものもあるよ。けれど、それで飯を食えるということはそれだけの基礎があると思うわけだよ。商売だという真剣さがある。

**尾木** 結局ああいうコンサートのステージなんかでも、学生バンドにズージャやらせたらいい線にきこえるというのは、学生バンドの特権であって、時間を費して朝から晩までそういう発表曲を練習してるからできるんです。学生バンドとプロの違いというのは初見で譜面ができるかどうかだと思うんです。

**山野** ということは、いまフル・バンド界は非常に辛い情勢だという一方、譜面ができるというので、レコーディング・メンバーがリンカーン・コンチネンタルに乗ったりしてレコーディング・スタジオのスターが生まれているということもある。

**森** アメリカでもそうじゃないですか。

**瀬川** ただアメリカの場合、レコーディングというのは伴奏がずっと質のいい、ジャズに近い伴奏ですからね。日本のように10代の歌手の伴奏とは違いますからね。

## ●ビッグ・バンド・ジャズの置かれた状況

**S J** 先ほどからビッグ・バンドの経営が成り立ち難いという話が出ているのですが、一方ではこの前のサド〜メル楽団のように、ジャズ・オーケストラが来日して超満員の聴衆を集めていますし、また純粋にジャズといえるかどうかかわからないですがビリー・ボーンのオーケストラなんか毎年のように日本に来ていつも超満員。そしてまたグレン・ミラーのオーケストラにしてもしょっちゅう来日してしかも楽しまれているわけです。そういうことを考えると楽しいビッグ・バンドというのは、お客さんをひきつけるだけの何かをもっていると思うわけです。少なくとも聴衆がいないという状況ではないわけです。それにもかかわらず日本のビッグ・バンドの経営が苦しいというのは、どこに問題があるのでしょうか。

**牧** 実はこのあいだ、ピーナツ・ハッコーのグレン・ミラー楽団をたまたま聴きに行ったんですよ。こんなもの聴きに来るのはないだろう、ガラガラだろうと思って行ったら、これが超満員。びっくりしちゃってね。そこへ、いわゆるジャズ評論家といわれる人が何人来ていたか。いソノテルヲと牧芳雄の2人きりだ。スイング・ジャーナルを含めて、とにかくグレン・ミラーだ、ビリー・ボーンだというものに背中を向けたがる、その姿勢がそもそも間違いないんだ。

**森** グレン・ミラーの音楽をききに行く人にいわせると、現在の演奏がどうのこうのというのではなくて、ああいっただ一つのスタイル、つくり上げられたものに感銘を受けてそれが今だに人の心を打つものがあるから出かけて行くという人が多いということなんです。だから現在のミラー楽団に比べれば、日本のビッグ・バンドも内容的にはそれ以上の演奏を行なっているけれど、日本独自の、日本の土壌の中でジャズをどれだけ形づくったかという点において、何かつくりあげなければならない時期に到達したんじゃないかと思っています。

**山野** そのとおりですね。

**牧** グレン・ミラーがああいう一つのサウンドをつくりあ



▲学生バンドを支援し続けている山野さん



▲学生バンドは自分たちのアレンジを使ったほうがいと語る牧さん

げたということ、これはたいへんなことだよ。そういう体臭があるということだから。フレッチャー・ヘンダーソンの符点8分音符の読み方は、ベニー・グッドマンの読み方とは同じ譜面を使っても違ったわけだよ。それだけバンドに体臭があった。そして、現在はどうか。アレンジャー中心の世界になって都合のいいミュージシャンを集め、カチッと譜面どおりの音ができ上るようになったが、そこには何も体臭がないわけですよ。

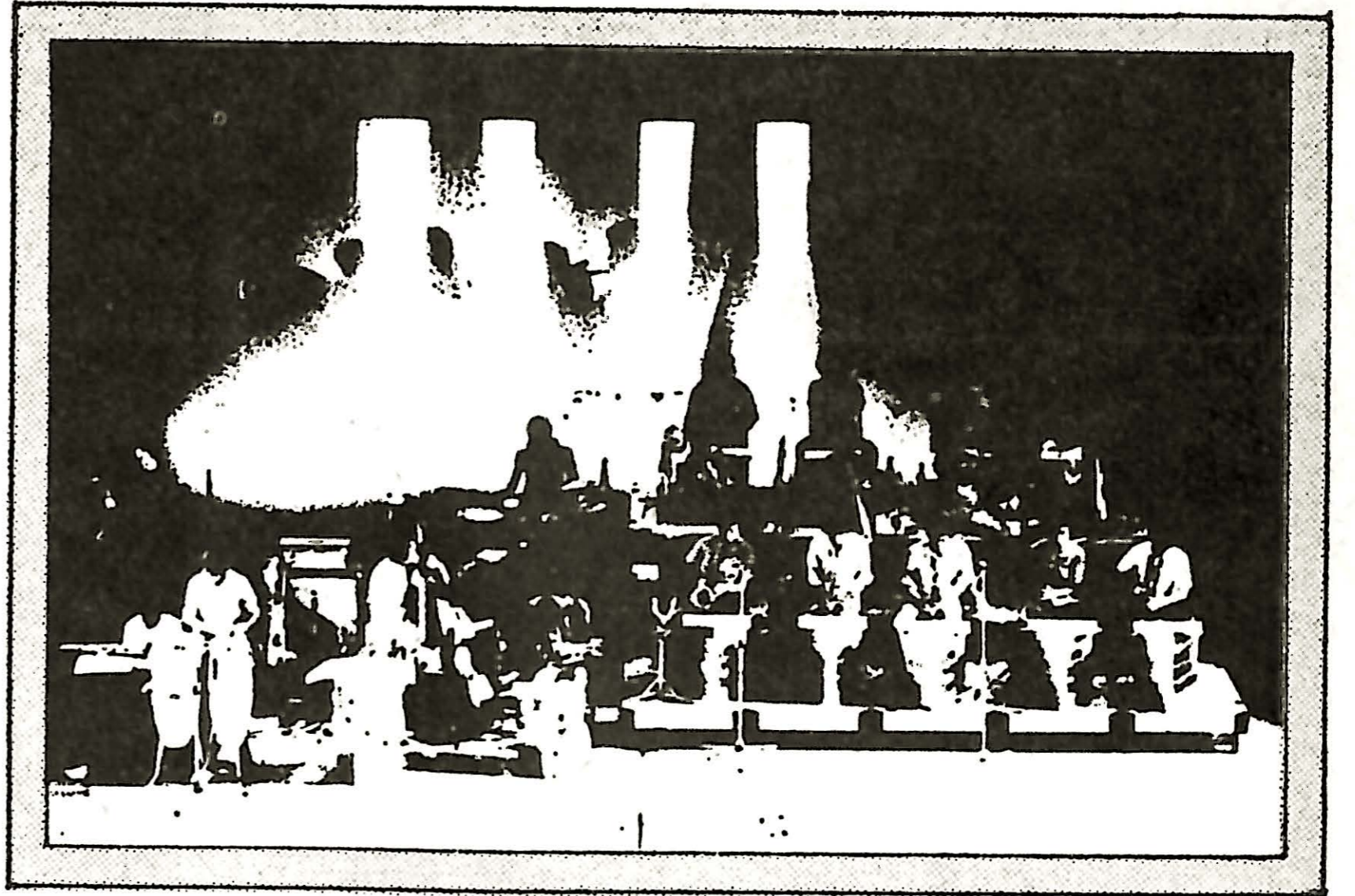
森 現実はそのとおりですね。だからその辺にプロとしての反省があるわけです。ブルーコーツとしても、そういう点を四六時中考えていますけれど、日本の土壌の上で、模倣の時代はとくに去らなければいけないわけです。

山野 日本人のジャズ・フィーリングを打ち出すときだということでしょうね。

S J ニューハードが無料のコンサートを定期的に続けて着実にファンがついている。コンサートそのものは非常にリラックスした形で行なわれているし、しかもニューハードとしてはやりたい音楽をやるというアプローチをとっているわけですね。そして森さんのバンドは、学生さんたちにマンツーマンでジャズを教えているわけだし、やはりこのあたりで、他のプロのバンドのほうからもう少し積極的なというか、苦しい中でビッグ・バンドのファンを獲得していくというアプローチが展開されていいような気がしますね。

瀬川 それには難しい点もいろいろあるようですね。つまり今の若いミュージシャンというのは、コマーシャルということに神経質になってしまっていて、要するにお客さんを喜ばせることを悪いことのように思う傾向がありますから。

S J 海外では今年デューク・エリントンが亡くなるという悲しい事実があったけれど、それが一つの勇気づけになって今度はマーサー・エリントンが楽団を引継いで若返りをはかっているようだし、ベイシー楽団なんかもデュークが亡くなったというので今年のニューポートではすばらしい演奏を行った。そういうふうに後続のバンドが意気に感じるという動きがあるし、日本でもニューハードがモンタレー・ジャズ祭に出演して絶賛を浴びるというイベントがあったわけだし、今は一つのチャンスだといえますね。



森 うちの場合も、山野さんのご好意で月1回銀座の歩行者天国の日にやっています。ブルーコーツのジャズを聴いてもらう楽しみの場になっているわけです。

牧 どこでやってるの。

山野 うちの小さいホールですが、いつも超満員で全部お客が入りきれない。

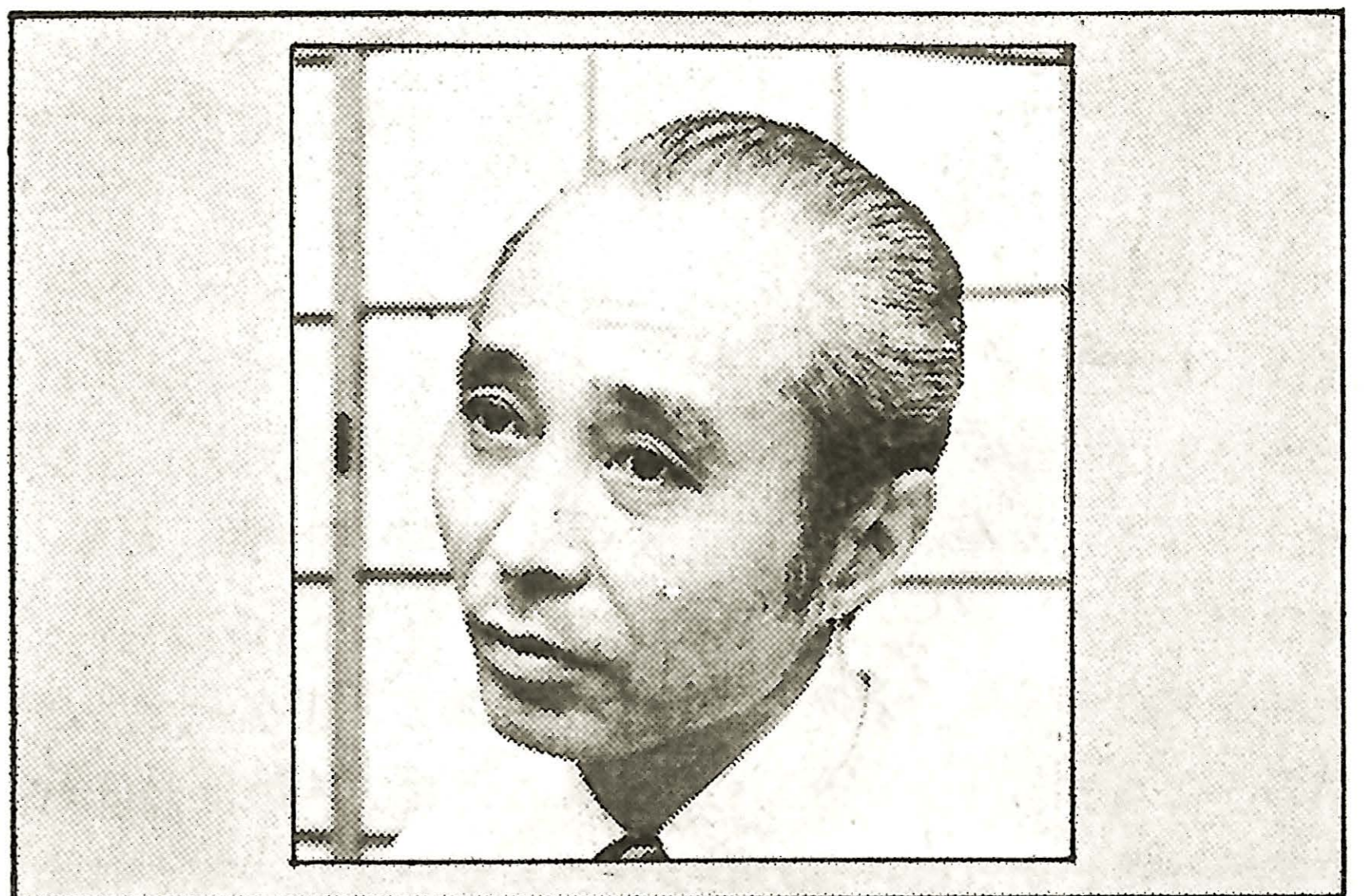
牧 この夏ウイーンに行く機会があったんですが、そこにショッピング通りがありまして、ブラブラ歩いていたら、町のまん中に丸いステージがあってジャズをやっていた。ウイナ・ワルツじゃなくて(笑)。テナー、クラ、トランペットの3管で変な編成だったけれどマイ・フェア・レディ>なんかをやった。やっぱり人が集まって喜こんで聴いているわけです。日本では騒音公害とかいって、なかなかむつかしいけれど、町を歩く人にそういうサウンドを聴かせるというのがあっていいと思うんだな。

森 山野さんと歩行者天国のとき街頭で何かやってみたいと話したことがあります。消防署とか警察とかいろいろ問題がありましてね……。

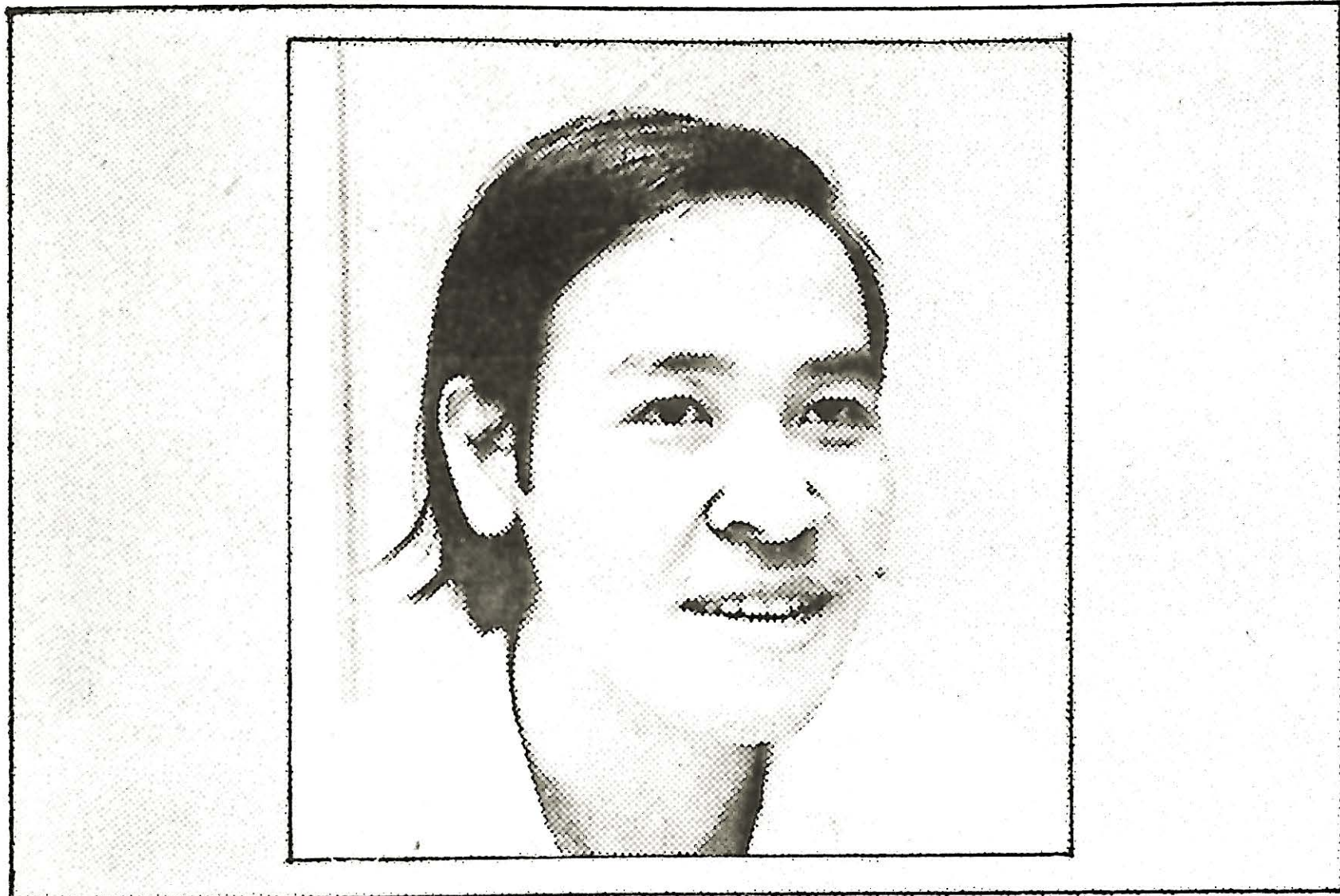
山野 今度、それが発展しそうなんです。歩行者天国のときに月1回くらいはやらせてもらえそうになりまして。歩行者天国というのはあれは国道なんですね。それで国道使用を銀座連合会で後押ししてくれれば何とかなるところまでいっているわけです。

牧 成功するといいいですね。

森 それができればブルーコーツだけではなく、ニューハードもシャープス&フラッツも一緒にやりたいですね。



▲プロに入ってビッグ・バンドでやっている人は尊いと語る瀬川さん



▲いいスコアーがほしいと語る法政の尾木くん

**S J** ニューヨークだとミュージシャンのユニオンが、夏のシーズンなんか公園で無料コンサートを開き、サド〜メル楽団だってランチ・タイムに聴けますからね。

**牧** それにはジャズを知らない人に、ジャズは楽しいなど思わせるものを提供しなければだめですね。

### ●学生バンドにおけるアレンジと今後の課題

**S J** それともう一つ、今年のコンサートをきいて、たとえばプロのバンドではできないようなことを学生のバンドが思い切ってやっているんで感心したんですよ。たとえば法政がやったコルトレーンの〈至上の愛〉なんてのは……

**牧** あれはよかったね。

**S J** こういう試みは学生のバンドだからこそやれたという気がします。今の若い聴衆というのはコルトレーンで育っている人が非常に多いというように考えると、やっぱりプロのバンドにしても若い聴衆にリレートするようなコンポジションをどんどんやらしてもらっても非常にいいことだと思いますが。

**尾木** ベイシーをいかに、どのくらいやるかというところにいま学生バンドの課題があるわけなんですけれども、それ以外にもいろいろな素材をもっと取り入れて、オリジナリティあふれるバンドにしていければと思っています。

**牧** 〈至上の愛〉のアレンジはだれがやったの。

**尾木** ニューハードの山木幸三郎さんです。

**牧** コンサートで各バンドをきいてわれわれが評価する場合に、いくつかの柱を立てたわけです。合奏の能力とかソロの優劣とかね。その中でアレンジをどう評価しようかということがボクら審査員側の課題だったんです。ボクの見解は、学生さんたちというのは自分たちの手でアレンジしたものをひっさげてきてやることによって初めてアレンジの点がつくと思うんだ。アレンジの技術が下手であっても、自分たちの手で自分たちがまとめたということになれば、それはそれで高く評価されてしかるべきだと思うんだ。だから、ただレコードのコピーをしたなんていうのは最低になるわけだ。ボクは今回のコンサートが終った時点で提案したんだけど、来年は一つの課題曲というか課題テ-

マを出そうかと思っているわけ。それはあるスタンダードのワン・コーラスでもいいし、それを学生の諸君がどうこなし、どう組み立てていくかによって初めてアレンジの点がつくわけで、それがなければアレンジの点なんてつけられないと思うわけなんですよ。

**S J** アレンジについては学生のみなさんどうですか。

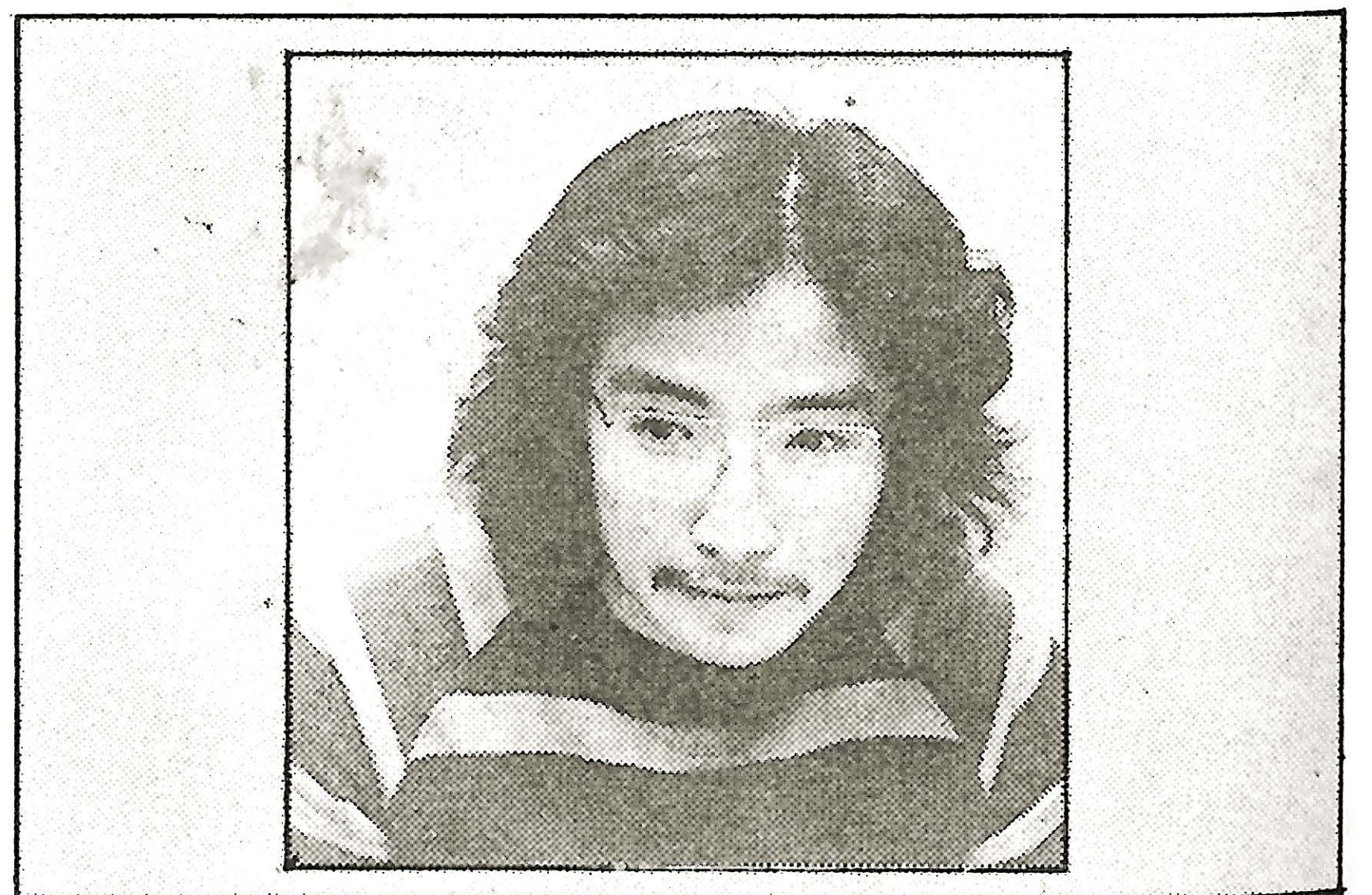
**山口** できることなら、自分たちでやりたいとは思いますがね。ここはこいうフレーズを入れ、こいう感じにやりたいなんていうのはだれでもが思っていますからね。下手なアレンジでもいいから自分たちでやりたいというのは、やまやまなんですけど、何しろそういう方面の勉強をしていないし基礎理論もないし、どうしても書けないんですよ。ときどき、少し書けるものがある場合は、パーティー用の簡単な曲なんかやりますが、しょせん自分たちが出したいと思っている音が出ないわけです。

**山野** 無理はないと思いますよ。

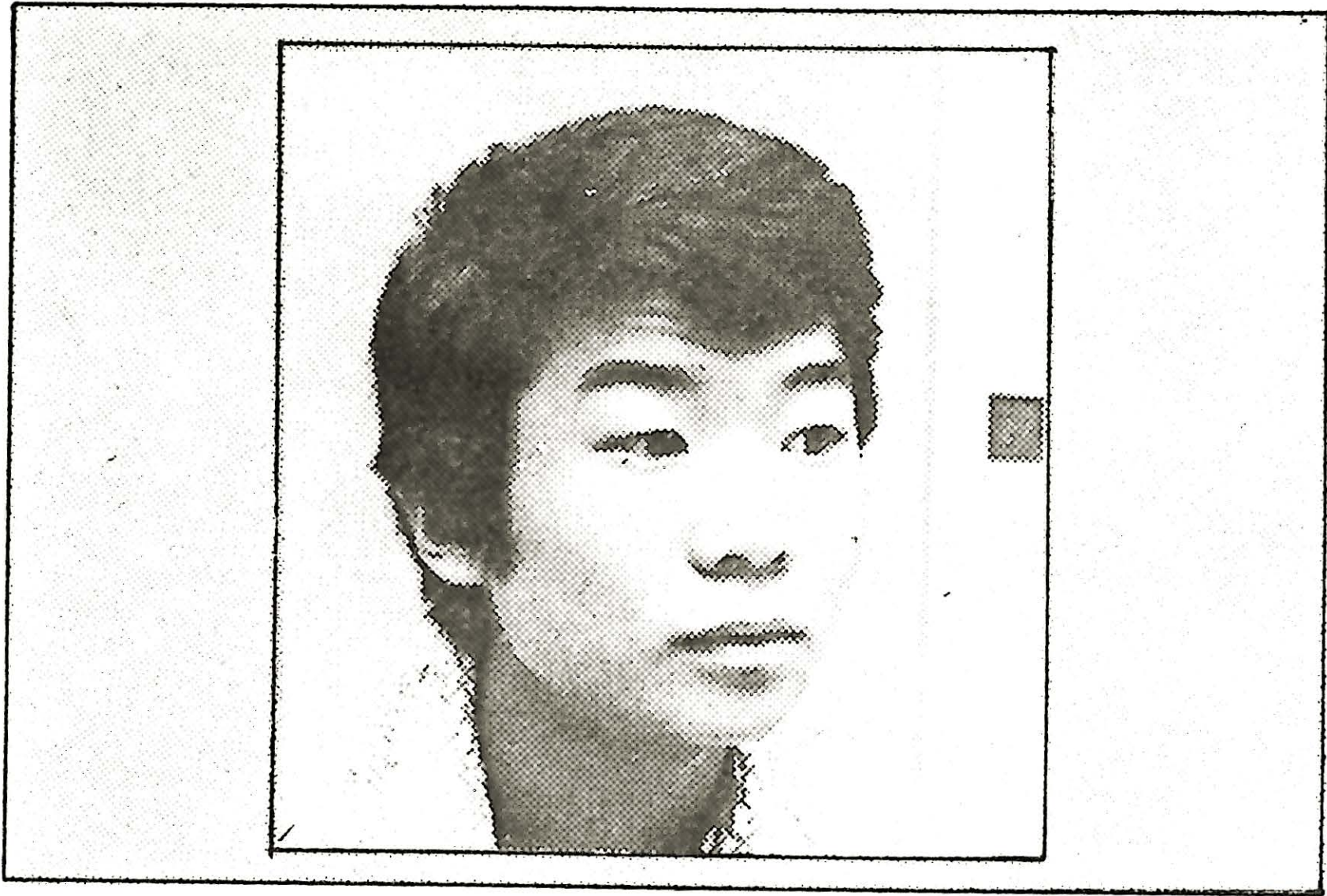
**山口** だから、音を出してみてももの足りなくて結局やりがいのあるものをやろうとすると、プロの方をお願いしてこまかいところまで注文をつけてこいう線でやりたいんですと頼んで書いてもらうより仕方ないと思います。

**S J** いま山口君がいった問題は、学生バンドだけでなく日本のビッグ・バンドの音楽そのものの現実に直結しているように思えるわけです。つまり、インストルメントのテクニックを修得していくという方向では非常に盛んだけれど編曲家が正式に理論を学んで、そういう人がつくるサウンドが一つのパターンをつくっていくという点、一部のアレンジャーを除いて確立されていないというように感じるわけです。たとえば、バディ・リッチがバンドを発足させると、まったく無名のアレンジャーが起用されてバッチリしたものを書くというような下地が日本にはない……

**牧** 山口君がいったように、たしかに少しは書いてみる者もいるがそれではがまんできかないという現実。だけどそこにまた一つ、学生さんの頭でかちの面があると思うんだ。欲ばりだと思ふんだ。そうやって自分たちのアレンジを使わなければ、いつまでたっても育ちっこないよ。こいう下地があってはじめていま編集長が指摘したような状況からの脱皮が可能になるんじゃないかな。事実ボクが慶



▲プロになる気はありません……と慶応の上原くん



▲自分たちのアレンジを使いたいのはヤマヤマだが……と山口くん

応でライトの部長をやったところ、書けるやつをたくさん知ってたもの。やっぱり学生さんの場合、一種の道楽なんだから、下手でもいいからどんどん発表してほしいな。

**森** 今のジャズ界でアレンジャーがあまりにも少なすぎるということはいえますね。

**上原** 自分たちでアレンジをやる場合、その人が楽器を持ってプレイヤーを兼ねる場合は難しいですね。

**山口** 楽器練習するだけで精いっぱいなんですよ。

**S J** そんなにいろいろはできないというわけですか。ところで学生さんにとっていま一番必要だと考えられること、あるいは悩んでいることはどういうことだろう。

**上原** たとえばデューク・エリトンがニクソン大統領(元)に誕生日に歓迎してもらったでしょう。それが、日本の場合、田中首相が森さんなり原信夫さんとか……誕生日がどうのっていうんじゃないくて、それだけジャズが一般的に理解されているかっていうことが……

**山野** 森さんかわいそうだよ。まだ70じゃないもの(笑)。

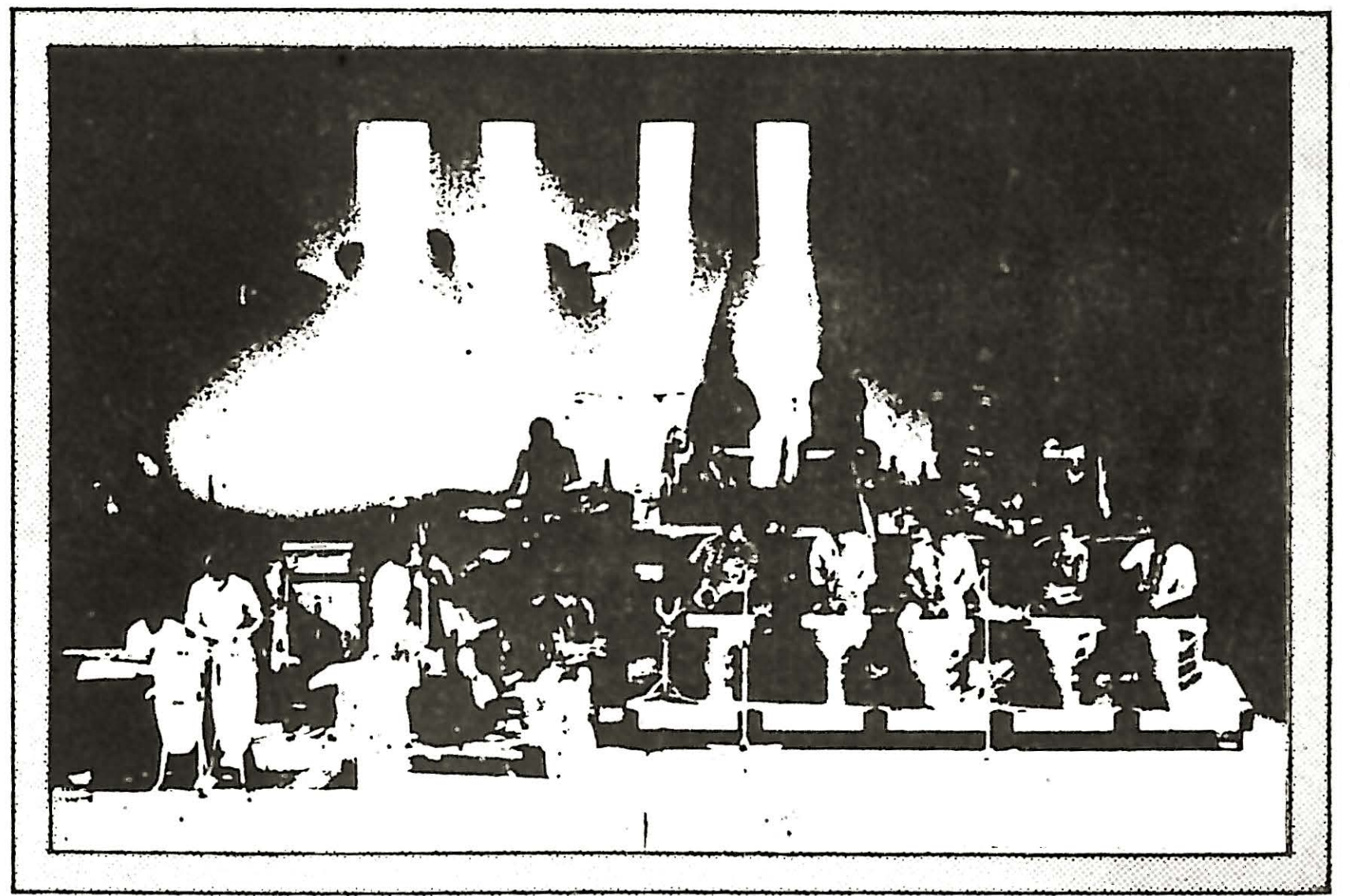
**森** 私も音楽やるときオヤジからドヤされまして、芸大受けるだけでドヤされたんですからね。日本人の感覚の中には音楽やるってことは、いまだに河原乞食という感覚が強いわけです。

**尾木** ボクの場合、実際問題として、やはりいろんなスコアがほしいですね。いいスコアはいっぱいあるはずなんですけど、そういうもののルートがなかなかみつからないんです。

**S J** 森さん、最後に学生諸君にどういう点を望むかきかせていただけますか。

**森** 学生諸君といっても、もう大人なんだから好きなことをやりなさいというだけですね。何も甘やかしてるわけではないんです。どのバンドでも、いったん音楽を通じて接点を合わせたら厳しくなるんだから、手かせ足かせしてもしょせん無意味だと思うんですよ。

**瀬川** 学生さんも、たとえばプロのバンドのコンサートをききに行った時、終わったら楽屋に押しかけて行って、あそこはどうだったんですかというふうに、もっと自然に打ちとけて交歓ができて、帰りは一緒に飲みに行こうというふうになればいいですね。



**牧** ボクが慶応におりましたころ、馬術部の部長もやってたわけです。部長になった第一声は「おまえらはどうせ馬はへたくそだ。オリンピックの選手になれるわけではない。だから馬がうまくなろうなんて思うな。だけど、部というものを通じて一つの人間的触れ合いとか人間関係を学ぶ材料にしろ」とね。そしたら次の競技会で間違えて優勝しちゃった。だからボクは、ジャズは上手じゃなくともいいから、グループ活動を通じて、ほんとうに人間愛をもった社会人になる機会をつかめといたいですね。

**瀬川** プロになるということのほか、非常にいいことだと思うのは学生バンドの出身者がレコード会社のディレクターやそういった音楽関係の職場に入っていますね。

**森** 私考えるんですけども、音楽はジャズも歌謡曲も分けるもんじゃないですね。私がつくったウタがあるんです。「音楽はきく人ありて楽しきかな」といって、うちにいつも飾ってあるんですよ。

**S J** アメリカでは、各大学に音楽部があって、ジャズ部門というのが確立した大学もずいぶんあるわけです。ジャズ界の新進の養成場としてもそれが確立されている。それがあまりにも今のところ日本にはないですね。そういう問題もいろいろ話し合いたいのですが、それはこの次の機会というので今日はこのへんで終わらせていただきます。

**森** 日本の政治家にもう少し、音楽に入りなさいということをおボクがいてると書いておいて下さいね(笑)。

●9月8日の山野ビッグ・バンド・コンサートの模様は 今月号本誌 274 頁バンド・スタンドにあります



▲司会役の本誌児山編集長

楽器を演奏する人、ジャズ・バンドを編成している人の紹介、通信の頁です。プロ、アマを問わず楽器の情報、メンバー募集など楽器やバンドに関する便りをお寄せください。

## バンド・スタンド

### ●ビッグ・バンド・ジャズ・コンサート

去る9月8日(日)、東京の日比谷公会堂で、16大学18バンドの出演によるビッグ・バンド・ジャズ・コンサート「レッツ・ドライブ・トゥゲザー」が開催された。このコンサートは、学生ビッグ・バンドの練習発表の場、山野ビッグ・バンド・サークル主催、本誌後援になるもので今回はサークル発足5周年を記念して初のコンテスト形式を採用、牧芳雄、いソノテルヲ、森寿男、五十嵐明要、北里典彦、山野政光、本誌児山編集長の審査員5人、そしてつめかけた多勢の聴衆のみまもる中で、次々と熱演がくりひろげられた。

コンサートに参加したのは、独協大学インギン・キャッツ・オーケストラ、日本大学ホワイト・リズムエコーズ・オーケストラ、芝浦工業大学カレッジ・ソサエティ・ジャズ・オーケストラ、日本大学ブルー・スイング・オーケストラ、北里大学ニュー・カウント・ジャズ・オーケストラ、日本大学リズム・ソサエティ・オーケストラ、国学院大学インサイド・ミュージック・オーケストラ、神奈川大学カレッジ・サウンズ・オーケストラ、日本医科大学ミッドナイト・サウンズ・オーケストラ、東京電機大学コースト・ジャズ・オーケストラ、明治大学ビッグ・サウンズ・ソサエティ・オーケストラ、東洋大学グルービー・サウンズ・ジャズ・オーケストラ、慶応大学ライト・ミュージック・ソサエティ、青山学院大学ローヤル・サウンズ・ジャズ・オーケストラ、立教大学ニュー・スウィング・ハード、専修大学グリーン・サウンズ・オーケストラ、法政大学ニュー・オレンジ・スイング・オーケストラ、東京経済大学スウィング・エコー・オーケストラで、激戦の末、各部門の栄冠は次の各校、ソリストの頭上に輝いた。

▶最優秀賞=慶応大学 ▶優秀賞=法政大学、日本大学(リズム) ▶特別賞=明治大学、東洋大学▶最優秀ソリスト賞=高見沢洋(テナー:法政大学)▶優秀ソリスト賞=武田龍太郎(アルト:日本大学)、尾木隆(同:法政大学)スイング・ジャーナル賞=法政大学(114ページに関連記事があります)

### ●コンサートを聴いて

山野楽器がスポンサーになって、東京の学生バンドを一堂に集めた大コンサート「レッツ・ドライブ・トゥゲザー」を開催するようになって、今年が5周年目に当る。今回はそれを記念して、特にコンテスト形式をとり、審査員を委嘱して出演バンドにつき、厳正な審査を行って、優勝校を決定するという方式をとった。その結果、上記の計16校18バンドが参加し、各25分間あたり、のべ8時間あまりにわたって熱演がくりひろげられた。わが国で、フル・バンド・ジャズ、ひいてはジャズ界全般の振興のために学生バンドの育成の必要が叫ばれてから久しいが、今回のような形で、学生のフル・バンドだけを対象にコンテストを行ったのは、今年が初めての試みであろう。近年プロのビッグ・バンド・ビジネスがこのうえもない困難な状況におかれ、心あるバンド・リーダー達が悪戦苦闘しつつあるのにくらべて、学生バンド界は、もちろん色々な悪条件下にはあるが、質量ともに着実に発展しつつあることは、誠に勇気づけられる現象であった。ただ、欧米と違って、政府や大学や社会、父兄からの積極的な財政その他各面の支援が全くない日本の学生バンドは、スコアの入手やプロのコーチを仰ぐ、といった面で、非常に苦勞をしなければならない。そういう状況を洞察した山野楽器は専務の山野政光氏が同じ学生バンド(慶応ライト)出身であるところから、いくたびも検討して長期的視野に立った学生バンドの育成策を立てて、山野ビッグ・バンド・サークルを設立した。森寿男とブルーコーツの協力を得て、学生に対するクリニックを継続すると共に、毎週日曜の昼、銀座歩行者天国に際し、山野ホールでコンサートを開いて一般の関心呼び集め、あわせて毎年学生バンドを20余も集めた大コンサートを開催してきたわけである。そして本年は本誌の積極的協力のもとに、司会のいソノテルヲ、ブルーコーツの森、五十嵐、北里各氏、S J誌の児山編集長並びに山野氏をメンバーとし、牧芳雄氏を委員長とする審査チームを設立して、主催者とS J誌から各種の賞を贈呈した。今年の特徴は、コンテストを意識してか、長編

の組曲で持ち時間をフルに使って挑戦したのが3校もあり、慶応(<Auckland Stuff Suite>中川憲二編曲)、法政ニューオレンジ(コルトレーン<至上の愛>山木幸三郎編曲)、東洋大学(<Funky Station>上田力作編曲)といずれも賞を得た。ライトは、コンガを加えた電化リズムのソリを多くした迫力と、スローでなおかつリリカルな合奏の美しさの両面を巧みに配合して、伝統的な実力水準の高さをフルに発揮した演出が成功したといえる。トランペット群が、ファーガソン楽団に劣らぬつやのある高音を聞かせたのは、上原のハイ・ノートのソロと共にバンド界随一のブラス・セッションたることを実証したが、サクソ群、リズム陣には時折乱れが見えた。法政は、何といたってコルトレーンにまっこうから挑戦した企画と、尾木(as)、高見沢(ts)と2人の優秀ソリストのプレイやフリーな合奏に聞かれる努力が高く評価されよう。このバンドは平生からエモーションにみち、ニューハードのジュニア版といったところだ。東洋の作品を書いた上田力は日本に数少ないジャズ・ロック専門のアレンジャーで、エレクトリック・ピアノを2台、パーカッションを3人に増大した電化リズムの威力をフルに発揮し、巧妙なリズムの変化と、トロンボーン4本とバリトン・サクソだけの低音のサウンドなど、初めてきかれる本格的なジャズ・ロック・オーケストラの迫力をきかせた。優秀賞を得た日大も、アルトの武田のソロイスト賞と共にみごとな好演だった。特別賞の明治は、クラーク・ボラーンやベイシーに徹して、合奏とリズムは十分にこなしていたが、こういうレパートリーだとソロイストによほど優れたのがないと損をする。同じ意味で私には、賞にはもれたが、立教がアンサンブルのクリスピーな美しさと、アルトのよくスイングするソロ・プレイとで非常に良い出来に感じられた。率直にいうと上位校の水準がこの2~3年更に上ったとは思えなかったが全体が平均してきたことは事実だ。とにかく、このコンテスト形式が出来たことは、将来への大きな刺激となることで関係者一同これを育成していきたい。

(瀬川昌久)



▲本誌編集長よりS J賞を贈られる法政大学ニューオレンジ・スイング・オーケストラの代表